

第15回木曾川上流自然再生検討会 委員意見

資料-2

項目		委員	委員からの主な意見	対応状況/対応方針案 ^{注)}
(1)報告事項	1) ワンド等の水際湿地の再生 (木曾川・揖斐川)	貴重種情報記載につき取扱注意	木曾川中流部では近年の大規模出水による影響が見られるが、事業は得られた知見に基づき検討されており、ワンド環境の健全化に向けて一定の成果はみられている。一方で、出水による土砂堆積等の影響については、今後も経過をみていくことが重要である。	◇今後も引き続き、土砂の堆積状況等に留意してモニタリングを行う。
			次年度施工が予定されてい 貴重種情報記載につき取扱注意 ワンドは、全体的に水深が浅いため、樹木伐開がワンドの水温上昇に影響を与えることが懸念される。ワンド周辺の樹木伐開は特に注意して計画を検討してもらいたい。	◆ご意見を踏まえ、ワンド周辺の樹木伐開方法を検討する。
			木曾川では本年度の出水は規模が大きかったが、ワンドへの土砂堆積は令和2年度の方が顕著であった。令和2年度に動きやすい土砂が流出したことで、本年度は堆積する土砂が少なかった可能性も考えられる。このような土砂動態を精査しておく必要もあると思われる。	◆ご意見を踏まえ、出水に伴う土砂動態の精査を検討する
			揖斐川中流部については、ワンド群が比較的近接しており、魚類の移動も期待できることから、条件の良い箇所だけではなく、条件の悪い箇所も対象に加えて検討を進めるとよい。	○次年度調査の留意事項として令和3年度報告書に整理した。 ◆令和4年度の現地調査計画策定時に、既往調査結果を参考に調査地点を設定する。
	2) 緩流域環境の再生 (杭瀬川)		杭瀬川の緩流域再生は小さな自然再生として、合理的に進められていると評価している。今後のモニタリングを河川水辺の国勢調査に引き継ぐにあたり、事業目的を踏まえた注意事項等を、申し渡し事項として整理することが重要である。	◎河川水辺の国勢調査への引継ぎ事項を整理する。
			杭瀬川 貴重種情報記載につき取扱注意 目標種であるハリヨの生息適正水温はあくまで18℃以下であり、23℃は生息限界水温であることに留意して検討を進めること。	◆ご指摘事項に留意して検討を進める。
			杭瀬川 貴重種情報記載につき取扱注意 に湧水は無いとのことだが、ワンド再生の水質調査でも示されている通り、水路を深くして湧水を引き込むことができれば、より適した水温環境を維持することが期待できるため、対策を工夫するとよい。但し、湧水が無酸素でないことは確認する必要がある。	◆ご意見を踏まえ、水深と水温の関係を把握し、どのような工夫ができるか検討する。
			杭瀬川では樹木伐開により動物は移動している。工事が魚類に与える影響は調査されているものの、魚類と動物の関係の調査は行われていないことから、河川水辺の国勢調査と絡めて、他の動物との捕食関係を把握する方法を検討されるとよい。	◎河川水辺の国勢調査の実施時に留意して、調査及びとりまとめを行う。
	3) 緩流域環境の再生 (伊自良川)		樹木を伐開すると樹林性の昆虫類は減少するが、代わりに草地性の種が増え、それらを食べる動物も増える。事業を進める上で何かしらの影響は出るが、重要種等の生息の有無は事前に調査されているので問題なく、目的に沿って事業を進めればよい。	-
			伊自良川の緩流域再生において、施工箇所で見られるようになっており、非常に良い成果が得られている。稚貝も確認されていることから、再生産の場として寄与していると思われる。	◇今後も引き続き、二枚貝類の生息状況に留意してモニタリングを行う。
伊自良川で確認されている特定外来種のオオフサモは、流れの緩やかな環境で繁茂する水草である。緩流域を再生したことによって生育するようになったと考えられるため、引き続きモニタリングを継続してもらいたい。		◇今後も引き続き、オオフサモの生育、拡大状況に留意してモニタリングを行う。		
4) 砂礫河原の再生 (長良川)	長良川における砂礫河原再生については、本年度でモニタリング調査を終了するが、ヤナギ類の樹高が高くなっていることもあり、高木種を間引く必要もあると思われる。	◆ヤナギ類が高い密度で生育している53.6-53.8k付近では、維持管理による樹木伐開や、地元住民との連携等によって対応することを検討する。		
	長良川の礫河原調査では詳細なモニタリングが行われたことにより、今後役に立つ知見が得られたと評価している。	-		
5) コアジサシの繁殖状況	コアジサシは主に海岸から河川中流域に営巣する鳥類で、個体数が少なくなっていることから、河川の保全対象種としてはよい。但し、近年繁殖期における出水が以前より多く、出水規模も大きいことから、コアジサシは河川を営巣地として選好していないように思われる。このため、今後はデコイを用いて河川に積極的に誘致するのではなく、どのような場所で繁殖しているかモニタリングを行い、自然な推移を見守ってほしい。	◎デコイの設置によって河川に積極的にコアジサシを誘致することは行わない方針とした。シェルターは、河川内で営巣が確認された場合に設置を検討する。 ◇今後も引き続き、コアジサシの繁殖状況をモニタリングする。		
	長良川は近年の河道掘削において比高の低い砂州が増えており、増水による冠水頻度も高くなっていることから、コアジサシの営巣は困難な状況である。今後は木曾川や揖斐川に存在する比高の高い河原が有力な営巣候補地になると考えられるため、河床高に着目したモニタリングによって、営巣に適した河原の分布状況等を把握し、再生方策を検討する必要がある。	◆コアジサシのモニタリング調査時に、比高の高い砂礫河原での営巣状況に留意して調査を実施したが、比高の高い場所では営巣地は確認されなかった。		
(2) 次年度のモニタリング計画(案)	河川の中州は渡り鳥の中継地として重要な環境であり、良好な河川環境の指標にもなることから、コアジサシ調査の際に継続して記録してもらいたい。	◆過年度に引き続き、コアジサシと併せて、砂礫河原で営巣する種や、渡りの中継地として中州を利用する種(ケリ、イカルチドリ、コチドリ、イソシギなど)について補足確認を行った。		
	今後の河道掘削を検討する上で、河原の有無だけではなく、冠水頻度に着目することが重要であり、河床高を意識したモニタリング調査を行ってほしい。	◆今後河道掘削を検討する際は、冠水頻度に着目して検討することとし、定期横断測量成果等を活用してモニタリングを行う。		
(3) その他	樹木伐開にかかる猛禽類調査	オオタカの繁殖に配慮した伐開方法、伐開時期が検討された結果、オオタカと共存可能な良い事例が得られた。	-	
		良好な保全対策の事例として情報発信していくことが望ましい。また、自然再生の観点から言うと、営巣が確認された場所に限らず、積極的にこのような取り組みを行うことも重要である。	◆今後の河川環境に配慮した河川整備における参考事例として活用していく。	
	その他	今後の事業として、長良川のワンド等水際湿地再生や木曾川の砂礫河原再生等が予定されているが、本当に必要な事業か、各河川の特徴をよく考慮しながら検討してもらいたい。	◆ご意見を踏まえ、必要な自然再生事業の内容を検討する。	

注)◇:第15回検討会当日に回答が済んだ事項、◆:対応状況(対応済みまたは対応中)、◎:今後の対応方針